法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-12

イタリアボローニャにおける持続可能な地域精神保健福祉システムへの挑戦 : 交流活動を通してみえた現状と課題

石井, 享子 / ISHII, Yukiko

(出版者 / Publisher)
法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Bulletin of the Faculty of Social Policy and Aoministration : Reviewing research and practice for human and social well-being / 現代福祉研究
(号 / Number)
18
(開始ページ / Start Page)
107
(終了ページ / End Page)
113
(発行年 / Year)
2018-03-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00014663

＜フィールドワーク実践報告＞

イタリアボローニャにおける持続可能な地域精神保健福祉システムへの挑戦

－交流活動を通してみえた現状と課題－

石　井　享　子[1)]

【抄録】　地域精神保健福祉システムの改革を実施したイタリアは、その後30年近い年月を経過し、さらに持続可能な精神保健福祉システムを模索している。今回はイタリア北部のボローニャを中心に持続可能な地域精神保健福祉システムへの取り組みへの現状と課題を明らかにするべく取り組んだ。さらに、2016年はWHOの国際精神保健デーがボローニャで開催されたため、日伊交流活動事業およびWHO行事への参加を実施してきた。その交流活動事業を通してみえた現状と課題を報告する。また、2017年度もイタリア保健省元精神保健局長、就労支援のリーダー達（哲学者、芸術家含む）などが来日され、日伊交流が現在も継続的、かつ具体的に取り組まれている。障がい者への差別や偏見を無くし、地域に普通に暮らしていくために、今、何を持続させ何を変えていくべきか？模索が続いている。

【キーワード】　日伊交流事業　　地域精神保健福祉システム　　共生社会

［目　的］

イタリアでは精神病院を廃止し、2 年前からは医療刑務所も廃止しグループホーム化にした。障がい者が住みなれた地域で暮らし続けるために、持続可能な精神保健医療福祉システムを模索している。今回はイタリア北部のボローニャを中心に持続可能な地域精神保健医療福祉システムへの取り組みへの現状と課題を明らかにするべく交流活動を中心に取り組んだ。さらに、2016年はWHOの国際精神保健デーがボローニャで開催されたため、日伊交流事業およびWHO行事への参加を行った。2017年度WHO国際精神保健デーには参加出来なかったが、イタリアからの来日されたリーダーや支援者達とのワークショップ、防災訓練の共同参加、ソーシャルキッチン実現に向けた交換留学の準備等の打ち合わせが実施された。12月には江戸川区のあるカフェに集合し、イタリ

1) 法政大学現代福祉学部・人間社会研究科教授

アン料理を楽しみながら、イタリア保健省製作の映画を鑑賞してきた。日伊交流活動を通しながら、それぞれの国において地域精神保健医療システムの持続可能な取り組みへの挑戦と課題を明らかにしたい。

［方　法］

視察および調査の準備は、2016年３月にNPO法人東京ソテリア主催のシンポジウムに来日してきたイタリアボローニャの精神科医、ソーシャルワーカー、教育庁のメンバー、当事者代表、就労支援団体の関係者等の構成によるシンポジウムに参加することから始まった。その後、ボローニャでの視察計画、およびWHO国際精神保健デーに交流を日本に依頼され、その準備に時間を費やした。

イタリア文化や習慣にも慣れるようにと、その後もイタリア関係者が定期的に来日され打ち合わせを実施し内容を深めていった。視察先の予備学習およびボローニャ滞在生活に向けての地理、食事、交流事業に参加する上での受け入れ可能な準備と体制について回数を重ね検討した。特に日本食の選定には風評被害の情報も入ってきたりして外国との交流活動の難しさも改めて考えさせられた。日本文化である茶道や華道、また書道の披露を初め、就労支援事業の支援者や家族会からも藍染作品や機織による衣類や作品等が多く提供された。切り絵や油絵、相撲番付表のお土産、他にも様々に準備を行った。アニメ映像を学習してきた当事者の写真撮影技術はイタリアでも大変人気が高かったようである。

現地においては、主に保健省精神保健局長を初め、昔からこの地域精神保健福祉システムへの挑戦に関わっていらした専門職の方々や、ボローニャ大学の教員およびNPO法人、家族会の協力により、視察および交流できる事業のアレンジを準備していてくれた。現地の都合で余儀なく行き先を変更する日も発生したが、結果的には、ほぼ目的は達成された。

日本からの参加者は、当初の20名より数名増えたため、ミラノ経由以外にドイツ経由で入国したメンバーもいた。そのためイタリア語の通訳が4人体制となり、語学の壁が緩和され、情報収集には非常に深めやすく有利となった。

WHO国際精神保健デーの交流事業は全員参加していたが、他の日は１日３コースの見学場所に別れ、各自の希望テーマに基づき、午前、午後と毎日交流活動を行った。

［結果および考察］

１．イタリアには精神病院が廃絶？

1978年イタリア政府による保健制度が成立し、精神病院が20年かけて閉鎖になり、総合病院内に精神科病棟が設置されている。任意で短期間の入院はあるが、強制的な入院は、危機介入の必要な場合のみである。入院にあたっては、市民権を保護のため、医師、市長、後見判事の同意が必要である。また、入院の長期化を回避するために、7日間ごとに入院の延期について更新されている。

日本の精神科医療と異なるのは、総合的支援システムがあることである。救急の場合、まず総合病院に運ばれ、総合診療医師が診察し、入院か否かは、精神科医師の判断になる。地域では全体の8割の方が、精神保健センターで治療を受けている。地域医療福祉のネットワークの核になっている。

ボローニャの精神保健局、正式には精神保健・依存症局といわれ、人口87万人の地域を管轄しており、人口1000人に対して1人の割合で、計865人の専門職が従事している。専門職とは、精神科医、看護師、社会福祉士、作業療法士、保健福祉士などである。リハビリ施設やNPO活動も重要な役割を果たしている。

２．社会的協同組合

社会的弱者の就労を対象に、15ヶ所の「社会的協同組合」が展開されるようになった。就労の支援を行うだけではなく、社会や文化の中で、一人ひとりの成長と能力の向上等、包括的なケアが行われている。法の施行後、40年間で、保護的な就労から自由市場における競争力を獲得したとのことである。協同組合立のホテル宿泊所には医療ケアの設備も整われ、障がいのある方も安心して宿泊が出来る存在である。

３．ステイグマ（差別と偏見）への取り組みとその努力

精神病院を廃止した経緯や、各地における活動、特に偏見や差別に対しての取り組み、持続可能な地域の精神保健福祉システムに向けての活動を、行政、大学および教育機関、保健医療福祉の専門職、当事者、家族会、NPO団体、就労支援施設の活動、リハビリ施設、ソーシャルキッチン関係者、地域住民などの視点から聴かせていただき、また現地視察を行った。

初期の段階は、関係者の会議直前に会議室やその集まる場所に汚物が撒かれて妨害されたりしたようである。犯罪と精神障がいの関連性を誤解して信じている人々には、根拠のあるデーターを揃えて誤解や偏見を軽減させる努力も継続させた。また、教育カリキュラムにも差別や偏見を無くす

ためのカリキュラムを企画し、障がい者もそうでない人も一緒に学ぶことを教育庁は率先して実施していたようである。

子どもたちにとって悪い影響はなく、共生して生きていくことへの学びの効果が大きかったそうである。強いて言えばカリキュラム進行に時間が掛かったことくらいだと説明された。

地域の中においても一緒に活動したり、働いたりすることが増えていったそうである。

「精神病院跡地」を「文化交流活動場所に活用」している現状も観察した。

当事者の文化活動の拠点である地域内の文化施設や、地域の絵画芸術を展開できる環境、ホームレスの人々や低所得者のためのレストランなど多くの施設を視察した。その他、実際の交流先として、行政組織としてはエミリア・ロマーニャ州立精神保健局、就労および日中活動サービスを運営する協同組合を多く視察できた。

居住施設としては2年前より、医療刑務所も廃止され、地域の中にグループホームとして活動が展開されていた。

地域精神医療としては地区の精神保健センター、および精神科診療および治療サービスの拠点などグループに分かれて交流してきた。特にステイグマ（差別や偏見）の問題への取り組みは初期より多大なエネルギーを費やし、苦労してきた話を実際に関わってきた専門職からの情報もあったため、持続可能なシステムにするためには、どのような活動が工夫され、続けられているのかと言うことに関心が強くなり、

サイコラジオ放送局（毎週月曜午後1時～イタリア全土に放送）、イルファロ新聞編集室、などを訪問し、交流を図った。他に、精神障がいのある方が役者として活躍する劇団などの交流も実施。指導者も一流であり、使う場所も一流の環境で実践しており目を丸くさせた。

差別と偏見にいかに取り組み、持続可能な地域ケアシステムを構築したのか？ボローニャでの交流先は以下の通りである。

1）行政組織

AUSL di Bologna DSM（エミリア・ロマーニャ州立地域医療連合公社　ボローニャ精神保健局）

2）就労および日中活動サービスを運営する協同組合

協同組合AssCoop

ARCI di Bologna協同組合

Arcobaleno協同組合

Provvidone協同組合

ロンデイーネデイケアセンター

カーザセツキオデイセンター

3）居住施設

REMS（医療刑務所も二年前廃止されグループホーム）

アルチペラゴ居住施設

AITSAM

4）地域精神医療

Zanolini管轄地区精神保健センター

SPDC（精神科診断および治療サービス）

他にも実際協同組合関連のホテルには医療ケア施設が設置

5）その他

サイコラジオ放送局（精神障がいをもつ方が運営する放送局）

我々も月曜日午後1時からのイタリア全土へのラジオ放送に参加した。

イルファロ新聞編集室（精神障がいをもつ方が実際に運営する新聞編集室）

アルテ・エ・サルーテ劇団（精神障がいをもつ方が役者として活躍する劇団）他など。

ホームレスの方や低所得の方々に提供するレストランにも参加

6）WHO主催の国際精神保健デー会議およびワークショップ、交流事業に参画

４．エコ活動と人々の支え合いの連携

スローライフやスローフードの実践レストランや、様々なエコ活動の実態も見落とせなかったため、可能な限り視察させていただいた。鳥類調査と保護活動、キノコの乱獲防止と自然保護。動物と自然保護。ガーデンや森林、草原の維持。その他。

私たちは精神障がいのある人の発病した時の気持ちや孤立感、その後の生活や働き方、地域の中で支援を受けながら普通に暮らすために、どのような人々の支えや社会資源が必要か？当事者が住民に発言できる機会があるだろうか、周囲も十分に考えて来たであろうか。

イタリアでは、障がいのある者も、無い者も、より良い未来へ向かうために互いを支え合う気持

ちが「当たり前に」存在し、それが障がい者と共に生きる社会を育んできた。実際に街の中で、ホテル内で、レストラン内で「市民の支え合う姿」が印象的であった。

レンガ色の中世の街、ボローニャから持ち込まれた社会的協同組合の思想は、私たち日本においても仕事への意識と、働く意欲を高めるため、イタリアの社会的協同組合と事業提携を始めている地域も現われてきた。地域の中で人として普通に生きる、そして暮らすイタリアの試みと聡明さと文化や芸術、就労支援の形、当事者の自己決定尊重の現状を数多く観察して、私たちにも出来ることから地域の精神保健医療福祉システムの新しい形を創り出したいと感じた。

課題としては、偏見や差別が減少し、共生の中での教育活動や就労は重要であるが、時間をかけて根気強く持続して取り組み続けないと、また新たな偏見や差別が誕生する。映画や教育カリキュラムの中で日頃から障がいのある人々をテーマにし、市民と考え続けることが不可欠である。単一な取り組みではなく、複合的に持続的に取り組む必要性が大きいと感じた。

［総　括］

精神障がい者の働き方改革が最重要課題でもあると考えた。障がいのある者も、無い者も、対等に働く場所、尊厳が取り戻されていく時間、地域の中であらたな可能性を拡げ、仲間を守り、支援者を助け、地域における持続可能なシステムを構築していく必要性がある。病院廃止した後に協同体のホテルに医療ケア室を設置、精神保健センター、リハビリ施設等は健康や症状のレベルにより、柔軟な対応をしている。NPO団体による頻繁な面談や、就労支援、レストラン、さらに柔軟な地域における芸術活動など住民と共に、「人生を楽しむ時空を多様に創って」いた。単に社会資源というサービスではなく、「人生を楽しむこと」、「美を大切にすること」、「尊敬すること」、「思いやりを持った対人関係を維持すること」等が印象に残った。

2017年度もイタリア保健省元精神保健局長を初め、就労支援のリーダー等が来日され、「日伊交換留学」、「ボローニャの農園での作業」、「ETA BETA」「調理や食事の美の追求」、「手工芸」、東京でのスローフードの飲食店の運営を通して「仕事と生活」、「社会との調和のとれた働き方を実現」させるように、また「障がいからの回復を信じて」、日本国内でもNPO法人、家族会、保健医療専門職、福祉専門職、ピアサポーター、住民ボランテイア等などの活動によって、徐々に我が国も新たな一歩を踏み出す活動の鼓動が始まっている。

差別と偏見を軽減していくための取り組みは、沢山の学びが出来たが、簡潔にまとめると、イタリアの歴史や文化・芸術、また人々のスローフードやスローライフ、エコ活動等の生き方、人間関係のあり方など根底にあるスタイルが参考になった。

その上で、障がい者への偏見、障がいと日常の暮らし、自然と人間生活、人格の尊重、家族の大切さ、地域の人々との関係性等を根本に据えながらステイグマ（差別や偏見）に取り組んでいた。

客観的なデーターを示し誤解や思い込みを減らして行く、たゆまない努力を持続的に続けることであり、次々誕生する新世代にも語り継いでいく必要性が大きいと再認識できた。教育カリキュラムにおいても、また映画や娯楽の中にも障がい福祉の作品を意図的に加えていく。イタリア全土の精神保健に係る健康レベル別のケアや医療保健の需要と供給を調査し、各州の必要なNPO団体の設置数を編み出したこと、そのNPOが網の目のように地域に分散し、障がいをもつ人々に毎週面接している。「先週何をしたの？」「来週何をしたいの？」など等、日頃から接触を蜜に行い、当事者の不安や行動を常に把握して一緒に楽しい時間を持つ様に努めていたこと。就労支援も、一流のオペラ歌手、ものつくりの指導者が寄り添っている。彫刻や芸術作品を直しながら当事者の方々は「この作業をしていると自分の壊れたこころも必ず治っていくと信じられる」と話していた。精神科医で初期からこの変革に係ってきた医師が「イタリアは料理も美味しい、景色も素晴らしい所、差別や偏見は人間の頭の中だけで起きてくるものだから忍耐強く取り組むしかないの！！」と言う言葉が力強く、印象に残った。